

輜重兵の労苦

京都府 山崎 正太郎

私の生家は米作農業、父兄姉私の四人家族で、兄は中支に出征中でした。母は私が三歳の時に病死、父は男手で私らを育ててくれました。

昭和十七（一九四二）年四月、徴兵検査の結果第一乙種で輜重兵と検査官に言われました。

昭和十八年一月二十五日、京都伏見深草の第六師団輜重兵第四十三連隊に入隊しました。

一期の検閲後、中支派遣軍要員となり、四月二十日宇品を出港、釜山上陸、貨車輸送で山海関を二十三日通過、二十六日南京西南方二五〇キロの揚子江北岸の安慶に到着、第一百十六師団（嵐）の輜重兵第一百十六連隊に転属入隊しました。

私は農家の出身ですが馬の取扱いの経験がありませんでしたので心配しましたが、輜重隊の中に

も歩兵がおりまして、その方に廻され、三八式騎兵銃を持たされ歩兵の訓練をやらされました。「嵐」の師団長は岩永汪中將、連隊長は南喜代彦中佐でした。

昭和十八年十一月二日常德作戦が始まり、私もこれに参加することになり、中隊の指揮班（十五人）の中の一員として三八式騎兵銃を持ち、四〇〇キロ西方の常德に向け輜重隊護衛の任務のため出発しました。

一カ月後の昭和十八年十二月四日、常德西南一〇キロの湖南省桃源県浮海坪で尖兵として前進中に敵の正規軍と遭遇、山上の敵は機関銃を猛射、これに対し我方は遮蔽物を利用して匍匐前進で応射しました。

生まれて初めての戦闘に興奮し、猛訓練で修得した戦闘法を実戦で発揮して敵を射撃中、焼けた鉄の棒でブン殴られたような衝撃を右の腰に受けました。振り返ると弾薬盒がブラ下がっているで

はないか、アレッと思いいく見ると帯革がちぎれて腰から血が流れ落ちていた。「ヤラレタ！」痛みはないが立てないのだ。仲間が「山崎！ 大丈夫か！」と介抱してくれる。

指揮班の後方には大隊長、中隊長もおられたが戦闘が始まると下馬されて指揮を取っておられた。

早速、仮包帯され馬に乗せられましたが、皆姿勢を低くして敵弾を避けているのに私だけ馬に乗せられていたので敵から丸見えになり、かえって目標になって危ない思いをした事が六十年たった現在でも印象強く思い出されます。今にして思えば敵弾が五センチでも左に寄っていれば貫通銃創の重傷で命を失うところであったことを思うと、神仏の御加護があったと思います。

戦闘が一段落したところで私を含めた負傷者の後送があり、揚子江をジャンクで漢口に向け下り、武漢陸軍病院に収容されました。病院には多

くの患者がおりました。私の傷名は右腰部擦過銃創です。

約三カ月の入院中にくしくも私の兄が部下の舞いに来院され、私の入院も知っていたらしく、兄弟が戦地で会えるなんて夢にも思っていませんでしたので本当に嬉しかったです。

兄は大正四（一九一五）年生まれで、豊橋予備士官学校出身の陸軍大尉で大隊長になっていました。兄は、その後まもなく長沙作戦で戦死しましたので、私の負傷も兄弟対面をもたらしてくれた不思議な因縁だと思います。勿論兄の戦死は私が復員して知った事ですから尚更不思議に思います。

昭和二十年三月十五日、退院と同時に独立歩兵第十一旅団（福）（宮下文夫少将）の独立歩兵二三一大隊（塔下実中佐）に転属、場所は漢口西北五〇キロの孝感という街（京漢線の沿線）でした。鉄道警備が主任務の部隊で召集兵が多かった

です。

昭和二十年四月十七日、京漢線打通作戦が始まり、これに参加することになりました。この作戦は「コ号作戦」と呼称されました。

六月になると掃討作戦になり、私は命令受領を命ぜられました。大隊本部で受領した命令を中隊に帰り中隊長に伝達する任務です。

漢口は中国でも暑いところで、屋根に止まった雀の焼き鳥ができるといわれる程の所ですから、兵隊も生水厳禁の命令が出ていても余りの暑さに生水を飲んで倒れる者があとを断たない状態でした。

そういう状況で命令受領者の中にも倒れる者が出て、ある中隊では受領者がいないという事態になったので私が二つの中隊の命令を一人で掛け持ちするようになりました。大隊本部で命令を受けて独りで第一中隊に行き命令伝達したのち、第二中隊まで走り伝達するのですが、単独ですから敗残兵の危険もあり充分注意して事故のないよう気

を付けました。

夜間戦闘の際は敵の曳光弾が花火大会のようで、それを見ながら命令受領に行ったりしました。「山崎はよく任務を果たした」と大隊長から賞詞をいただきました。

昭和二十年三月、北京の通信隊へ通信教育を受けるため大隊の通信隊長と三人が列車で出張しました。

三カ月の教育が終了したので原隊に帰ろうとしたら鉄道が寸断されてスムーズに帰隊できず、途中歩いたり、またはハンドカーといって線路の上を手でこいでトロッコを走らせたり、途中あちこちの兵站で食事や宿泊を世話してもらいながら八月十二日ようやく帰隊しましたが、約一カ月半の間放浪の旅でした。

通信の仕事をしていますと無線で東京各地のニュースが入って来ます。上の方から「情報を洩らすな」と厳命されていましたが終戦が近いこと

はわかってきました。

昭和二十年八月十五日、終戦を孝感で迎え、蒋介石軍が来て武装解除となり抑留という形になりましたが、武器が無くなったのが今までと変わった点で、生活そのものは大した変化はありませんでした。労役という程の作業はなく、生活に必要な薪集め等の軽作業の使役に出る程度でした。

武装解除後弾薬庫が八路軍に爆破される事件がありました。糧秣庫、被服庫等は依然日本兵が執務しており、蒋介石の温情ある終戦処理には感謝しています。

昭和二十一年四月、復員が始まり貨車輸送で上海に集結、五月米国の上陸用舟艇に乗船しました。五月三十日山口県仙崎港に上陸。復員手続き後列車に乗車、綾部駅にて下車、三年ぶりになつたかしの我が家に帰りました。

初年兵の時一緒に入隊した同年兵が何人かおったのですが、皆無事に帰ったかどうかは全く判り

ません。私が負傷した時に別れたきりですから……。

通信教育が終わる時に、教育隊長から北京に残りたければ残れと勧められましたが、ソ連抑留の關係があつたのか今もってわかりません。